

# 楽曲解説

解説=宮澤淳一

3/7(水) 第116回東京オペラシティ定期シリーズ

3/9(金) 第904回サントリー定期シリーズ

3/11(日) 第905回オーチャード定期演奏会

3/7

3/9

3/11

フリードリヒ・ゲルダ(1930-2000)

## コンチェルト・フォー・マイセルフ

近年、クラシック音楽と他の音楽ジャンルを自在に往来するアーティストが活躍する機会が増えてきたように思われる。オーストリアのピアニスト、フリードリヒ・ゲルダ(1930-2000)はその先駆かもしれない。

ゲルダは、同世代で同じウィーン出身のパウル・パドゥラ=スコダ、イェルク・デームスとともに、「ウィーンの三羽がらす」とも呼ばれた気鋭である。「三羽」とも「音楽の都」の伝統を受け継ぐ名手として定評があったが、ゲルダは異端児的な存在で、モーツァルトやベートーヴェンを中心に正統的な名演・名録音を披露しつつ、ジャズ・クラブに出入りをして、自由な音楽活動を標榜し、賛否両論を巻き起こした。そして、その延長線上で自演用を中心に作曲もした。

「ピアノと管弦楽のためのソナタ・コンチェルト」を副題とするコンチェルト・フォー・マイセルフは、1988年3月9日(木)にミュンヘンのフィルハーモニー・ホール(ガスタイク)で初演された。ミュンヘン・フィルハーモニーをゲルダ本人が弾き振りし、ウェイン・ダーリング(エレクトリック・ベース)、ミヒャエル・ホンザーク(ドラム)との共演だった。当日のプログラムは、前半がベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番で、後半にこの自作が置かれた。

創作過程の詳細は不明だが、この曲についてゲルダは、「俺にとって離別の作品と言えるかもしれない」と述べている(『ゲルダの真実』田辺秀樹訳、洋泉社、1993年)。つまり、2度の結婚を解消したあとに恋人となった歌手ウルズラ・アンデルスとの別れの苦しみをこの作品の創作によって乗り越えたのだという(ちなみに彼は1982年に「コンチェルト・フォー・ウルズラ」というウルズラをフィーチャーした作品を発表している)。

作品は全部で4つの楽章から成る。軸足はクラシック音楽に置かれているが、ジャズやポップスによってそれを明快な形で拡張させようとゲルダは試みている。

**第1楽章**は、ニ長調、アレグロ、4/4拍子。出版譜には、「The New in View (... then Old is New) 」との題名がある。解釈するなら、「新しいものが目の前に現われる(……すると古いものも新しくなる)」といった意味か(あるいは「もの」は「人」とも「世界」とも解釈可能だ)。付点音符を反復するリズムカルな動機を含む輝かしく厳かな主題で始まる。モーツァルトか

ベートーヴェンを思わせる世界だ。やがてピアノ独奏がジャズ風のくつろいだ旋律を弾き、エレクトリックベースとドラムスも加わる。大枠としてはオーケストラとピアノが“クラシック対ジャズ”の緊張関係で音楽を盛り上げていくが、金管楽器群がビッグバンド風に前面に出る場面もあり、全体の融合性は高い。末尾にはクラシック音楽の慣例どおりピアノ独奏によるカデンツァが置かれる。即興演奏が指定されており、独奏者の面目躍如の場である。

**第2楽章**は、ロ短調、3/4拍子で、“Lament for U (Aria con variazioni)”と題されている。「Uのための嘆きの歌(アリアと変奏)」と訳せそうだが、このUとは、You(君)であると同時に、別れた恋人のUrsula(ウルズラ)を指すらしい。楽譜の指示は、アダージョ・ラメントーソ、マ・コン・モト(嘆きようなアダージョで、しかし動きをもって)である。冒頭でオーボエ独奏が奏でる抒情的な旋律に基づく4つの変奏とコーダから構成されている。バロック音楽のオーボエ協奏曲にありそうな雰囲気であり、イージーリスニング風ですらある。楽章の最後はピアノ独奏によるF#で終わる静かな分散和音で閉じられ、そのまま第3楽章に移る。

**第3楽章**の題名は“Of Me (Free Candenza)”(「私の(自由なカデンツァ)」)である。出版されている楽譜には、フェルマータ記号を付しただけの二段譜が掲げられ、その上にこう書かれている——「ピアノ独奏。この[前楽章の]フリギア調の半終止の末尾の根音F#から始め、長大なカデンツァに突入せよ。知る限りのあらゆる効果を用い、本当に「ぶっ飛んだ」感じで行け。調性も他のあらゆる「音楽的」(すなわち因習的)な要素も、遠方あるいは下方に置き去りにせよ。……それから……最後に、ゆっくりと地上に戻ろう。フリギア調の半終止に、あるいは少なくともその根音のF#に戻るのだ。……(ペダルを踏む)……そしてアツカ[休止なし]でロンド・フィナーレに進め。」現存するグルダ本人のライブ映像では、立ち上がり、ピアノの高音部の弦を指で直接はじいたり、本体を叩いたりといった場面もある。まさに「ぶっ飛んだ」(far-out)楽章である。

**第4楽章**は二長調、6/8拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ。題名は“For U And U / And You And You / All Of Me / For All Of You (Rondo Finale)”である。直訳すれば「UとUのため/そして君と君[のため] / 僕のすべて / 君のすべて(ロンド・フィナーレ)」。楽章冒頭で、オーケストラとピアノが掛け合いで“タターン”という音符を連打するが、楽譜を見るとそれらの音符には、“FOR U / AND U / AND YOU / AND YOU …”と文字が付されている。またそれに続くこの楽章の主題とおぼしき雄弁で力強い付点二分音符の旋律には“ALL OF ME / FOR ALL OF YOU”とある(筆者はシューマンの幻想曲ハ長調作品17の第2曲の主題を思い出した)。この終楽章は、独奏者の即興を交えつつこれらの素材を反復していくロンドであり、途中、トリオによる「ラテン・ロック」(と楽譜に記載)の場面などもはさんで盛り上がる。最後は“ALL OF ME…”の主題がオーケストラ全体で強調され、音楽は華麗に締めくくられる。

この作品はその後にも再演されたし、本人によるライブ映像・録音盤も入手可能だ(公式のYouTube映像もある)。グルダは、1967年、69年のあと、24年ぶりの1993年に3度目かつ最後の来日を果たしたが、その時にこの曲を新日本フィルハーモニー交響楽団と共演し、大いに話題となった(11月19日、昭和女子大学人見記念講堂)。

[作曲年代] 1988 [初演] 1988年3月9日 ミュンヘンにて作曲者の弾き振りによる  
[楽器編成] フルート、オーボエ2(演奏によりオーボエ・ダモーレ持ち替え)、ファゴット2、ホルン2、トランペット3、トロンボーン2、ティンパニ、エレクトリックベース、ドラム、弦楽5部、独奏ピアノ

## セルゲイ・ラフマニノフ (1873-1943) 交響曲第2番 ホ短調 Op.27

ヴィルトゥオーゾ・ピアニストでもあったセルゲイ・ワシーリエヴィチ・ラフマニノフ(1873-1943)は、20世紀に活躍しながらも、後期ロマン派のスタイルを貫き、あらゆるジャンルを手がけ、傑作を書いた。3つある交響曲のうち、第2番は、政情不安なロシアを避けて、ドイツのドレスデンに活動拠点を移していた時期(1906-1909)の作品である。

演奏に50分以上を要するこの長大な作品は、1903年頃から書き始めていたが、本格的に創作に励んだのは1906年の秋からで、1907年7月に別荘のあった南ロシアの避暑地イワーノフカでオーケストレーションを開始(8月に同地で次女誕生)。完成はドレスデンに戻ってからの1908年1月。初演は同年1月27日(新暦2月9日)にペテルブルクのマリンスキー劇場でアレクサンドル・ジローティの指揮で行なわれ、成功を収める。そして、チャイコフスキーの弟子であった作曲家のセルゲイ・タネーエフに捧げられた。

**第1楽章** ラルゴ——アレグロ・モデラート、4/4拍子——2/2拍子、ホ短調。導入部付きのソナタ形式(呈示部→展開部→再現部)をとる。導入部冒頭の一連の動機は作品全体に関与する。それらの動機とは、(a)冒頭のチェロとコントラバスによる低音の重苦しい動き、(b)典礼風の本管合奏の和声進行、(c)第1ヴァイオリンの高音による抒情的な旋律(メゾフォルテ)——の3つである。これらが複雑に絡み合いながら曲想を高めたあと、独奏イングリッシュホルンによる情感豊かなカデンツァを挟んでソナタ形式の呈示部が始まる(アレグロ・モデラート)。即座に第1・第2ヴァイオリンが演奏する流麗な旋律が第1主題である。これが大きな高まりを作り、静まり、クラリネットの独奏を挟んで第1ヴァイオリンが甘美な第2主題(ト長調)をゆったりと歌う(モデラート)。やはり音楽は高揚し、夢見心地がしばらく続き、短調に戻るところまでが呈示部である。(本公演では、反復は省略される)。

展開部は、ファゴットとホルンの刻むリズムを背景に独奏ヴァイオリンが序奏部の(c)の動機を歌うところから、(a)(b)の動機も加わり、起伏に富んだ劇的な音楽が繰り広げられる。ク

クライマックスを経て、木管楽器群が愛らしい和声進行をゆっくりと響かせる場面からが再現部である(モデラート)。弦楽器群主導で第2主題が歌い上げられたあと、急にテンポが上がり(ピウ・モツ)、(c)の動機が再び前景化し、嵐のような激烈なコーダをもって楽章は不意に終わる。

**第2楽章** アレグロ・モルト、2/2 拍子、イ短調。3部形式のスケルツォ楽章であり、ホルンの高らかな合図を承けて第1ヴァイオリンが軽妙な主題を奏で、音楽は勢いよく流れ出す。やがて流れが止まり、独奏クラリネットの旋律が新しい合図となって、第1・第2ヴァイオリンが抒情性的かつ勇壮な旋律を歌う(中間部のモデラート)。その後、前半部が再現されて終わる。

**第3楽章** アダージョ、4/4 拍子、イ長調。冒頭から第1ヴァイオリンによって甘美な旋律が奏でられる(エリック・カルメンの1974年のヒット曲「恋にノータッチ(Never Gonna Fall in Love Again)」や、最近の缶コーヒーのテレビCMでも有名)。独奏クラリネットの牧歌的な旋律がこれに続き、ロマンティックな情感を盛り上げていく。途中、第1楽章の(c)の動機が弦楽合奏に現われ、曲想に厳しさを加える。音楽が最高潮に達すると、休止をはさみ、楽章前半の素材がさまざまな楽器で静かに甦り、甘美で切ない音楽は繊細さを増していく……。

**第4楽章** アレグロ・ヴィヴァーチェ、2/2 拍子、ホ長調。ゆるやかなソナタ形式。跳ねるような前奏で始まり、オーケストラ全体が喜びに満ちた旋律(第1主題)を呈示する。おとなしい行進曲風の推移部を経てこの主題は華々しく再呈示される。その後、管楽器群の三連符の伴奏に乗って、弦楽器群がユニゾンで優美な旋律(第2主題)を情感豊かに歌う。曲想が静まると第1ヴァイオリンが第3楽章冒頭の主題をゆったりと奏でる(アダージョ)。だがすぐに速いテンポに戻り、緊迫した中で独奏フルートが第1楽章の(c)の動機を聞かせる。「運命の動機」(“タタターン”)なども新たに加わり、さまざまな意匠が凝らされる。やがて第1主題が、続いて第2主題がそれぞれ長大に再現され、クライマックスを迎え、全曲は高らかに終わる。

[作曲年代] 1906年～1907年 [初演] 1908年 ベテルブルク

[楽器編成] フルート 3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ3(3番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、グロッケンシュピール)、弦楽5部

みやざわ・じゅんいち／青山学院大学総合文化政策学部教授。著書に『グレン・グールド論』(春秋社・吉田秀和賞)、共著に白石美雪編『音楽論』(武蔵野美術大学出版局)など。訳書に『リヒテルは語る』(ちくま学芸文庫)、『改訂新版 音楽の文章術』(共訳、春秋社)など。